

最近久しぶりに夢を見た。夢の中で私はエルサルバドルの村落を歩いたり、風景を眺めたりしていた。目覚めると、子供時代の古いアルバムを見た感じがした。エルサルバドルで生活していたのは12年前だが、その時の体験が自分の中にずっと強く残っているようだ。

2007年から2年間、JICA 青年海外協力隊として、エルサルバドル、モラサン県の保健所(SIBASI モラサン)で活動した。活動内容は JICA シャーガス病プロジェクトの隊員として、同県内で、この病気の媒介虫であるサシガメが生息する土壁や日干しレンガの家への殺虫剤散布、及びこの病気に関する住民への啓発活動を推し進めることだった。土壁や日干しレンガの家は街中には少なく村落に多い。したがって私の活動場所は村落だった。

協力隊は私の長年の夢だった。協力隊として、村々をひとり歩きまわり、活動することが夢だった。協力隊になれるのであれば、国はどこでもよかった。協力隊の面接試験では、国は問わないから協力隊に参加させて欲しいと熱意を語ったが、結果は不合格。ただし期限付きで私に合う要請が出てくれば合格、というものだった。そんな補欠合格者を必要としてくれる国が出てくれることをじっと待った。期限半ば頃、JICA から携帯に連絡があり、要請は感染症対策(シャーガス病対策)で派遣国はエルサルバドルだが可能か?と問われた。その場で即答した。それがエルサルバドルとの出会いだった。協力隊が夢だった私にとって、エルサルバドルの感染症対策(シャーガス病対策)の要請はまさに救世主だった。

日本での派遣前訓練、派遣後首都サンサルバドルでの約1か月の語学訓練を終え、活動先であるSIBASIモラサンに赴任した。モラサン県はエルサルバドル東部にあり、黒い陶磁器が名産のグアタヒアグア市、先住民の文化が色濃く残るカカオペラ市、激しい内戦の舞台で戦争博物館があるペルキン市、内戦時に村民の大虐殺が行われたエルモソテ村があるミアンゲラ市などがある。モラサン県は他県に比べ派手な観光地もなく地味な印象だが、内戦というこの国の忘れてはな



村落の家屋でのサシガメ生息調査

らない歴史を身近に学ぶことが出来る。そして何よりも他県に比べ治安が良いことが、協力隊の活動をするうえで利点だった。首都からモラサン県都サンフランシスコゴテラ市までは、サンミゲルを経由して車で約3時間である。SIBASI モラサンはサンフランシスコゴテラ市の町の中心地にある。自宅はSIBASI モラサンから徒歩約10分の町の入り口にあった。

カウンターパートはSIBASI モラサンの県媒介虫対策班長で、シャーガス病の他マラリアやデング熱などの県内のベクターコントロールをしていた。明るく社交的で仕事に対し情熱を持ち、何事にもアクティブで頼り甲斐のある人だった。彼にとって、私が日本人なのかエルサルバドル人なのかは

関係なく、一諸に仕事をする上で使えるか使えないかが重要だった。私は彼のその考え方が気に入っていた。カウンターパートはシャーガス病プロジェクトに熱心に働きかけ続け、SIBASI モラサンにプロジェクトを入れた。カウンターパートが彼でなかったら、そしてシャーガス病プロジェクトがなかったら、エルサルバドルからの要請は無く、私は協力隊の隊員になれなかった。エルサルバドルとシャーガス病プロジェクトとカウンターパートが、私の夢を叶えてくれた。

SIBASI モラサンのシャーガス病対策が活発化するタイミングで赴任した私は幸運だった。赴任早々にペルキン市近郊の市を対象にサシガメ生息調査を実施した。ペルキン市役所に同市近郊の保健推進員たちを集め、カウンターパートによる教育を実施、保健推進員たちにプロジェクト制作のシャーガス病啓発の紙芝居(ロタフォーリオ)を配布し、管轄村落内の家屋に対するサシガメ生息調査を依頼した。プロジェクト専門家とSIBASI モラサンの県保健推進員長が同行した大々的な調査だった。保健推進員は厚生省の職員で各村落に配置され、管轄村落内の保健推進業務全般を行う。よって管轄村落内の土地や住民などの事情に精通している。モラサン県内に約180名いた。

調査開始後、保健推進員たちが捕獲したサシガメ入りのペットボトルが続々とSIBASI モラサンに集まった。ペットボトルには捕獲された家屋の種類(土壁なのか日干しレンガ壁なのか)や住所情報が記載されている。それらの情報をSIBASI モラサンの昆虫学専門官(エントモロゴ)と取りまとめた後、サシガメをサンカルロス保健所に持ち込み、保健所のラボラトリストの協力を得て糞内のシャーガス病原虫検査を行い、一方で調査により判明したサシガメ生息家屋へ媒介虫対策班による殺虫剤散布を実施した。それらのスキームをカウンターパートが計画し関係者を巻き込んで押し進めていった。赴任早々の私はスペイン語力と経験が不足していて戦力とはならず、カウンターパートにとって赤ん坊同然で、理想と現実の違いを思い知った。カウンターパートの仕事の進め方や保健推進員たちの仕事に対する姿勢や誠実さを注意深く観察することしか出来なかった。そして村落で安全



カウンターパート、媒介虫対策班、保健推進員によるサシガメ生息調査のミーティング

かつ効果的に活動する為には、保健推進員の協力が不可欠である事を学んだ。

赴任後半年はスペイン語に苦勞した。教科書で学ばない会話中の生きたスペイン語が問題だった。会話のスピードに理解が追いつかなかった。毎日スペイン語の雑音のなかで生活しているように感じた。自分の考えをカウンターパートや同僚たちに十分に伝える事が出来ず、片言で話す幼児のように感じた。

SIBASI モラサンのシャーガス病対策はペルキン市近郊以降も他市に対し拡大していったが、カ

ウンターパートと媒介虫対策班は、シャーガス病だけでなく、マラリア、デング熱のベクターコントロールもする必要があり、それらはシャーガス病以上に重要だった。シャーガス病は村落にある土壁、日干しレンガの家屋に生息するサシガメが媒介虫であるのに対し、蚊が媒介するマラリア、デン



グ熱は、シャーガス病よりメジャーな病気だった。SIBASI モラサンがマラリア、デング熱の対応に追われている時は、それらが優先された。協力隊の任期は僅か 2 年である為、停滞する時間は私の気持ちを焦らせた。

赴任後半年経ち、今まで雑音だったスペイン語が、突然鮮明に理解出来るようになった。それは SIBASI モラサンでカウンターパートが私の活動に対する率直な評価を彼の上司に話している時だった。それは私を発奮させたが、まだ何も成果を出すことは出来なかった。ただこの時からスペイン語は雑音ではなく、意味のある言葉となった。

トララ市の殺虫剤散布活動の為、同市市役所で地元の散布員達への教育を実施した日、体調に異変を感じた。自宅で数日間静養したが、高熱と平熱を繰り返し、食欲を失い、身体を動かすことが出来なくなった。マラリアかデング熱の罹患を疑った。夜中に生命の危険を感じ、カウンターパートに連絡、救急車の手配を依頼した。早朝、救急車が自宅に来て、首都にある病院まで私を搬送した。SIBASI モラサンのエントモロゴが付き添ってくれた。病院に着いた時は脱水状態で即入院することになった。救急車とエントモロゴは折り返していった。モラサン県でもっと緊急で重篤な患者が待っているかも知れなかった。入院中、何度もマラリアやデング熱の検査をしたが、結果は常に陰性で、原因を特定することが出来なかった。10 日間ほど高熱と平熱を繰り返した後、原因不明のまま退院した。入院中、身体は動かず体力は削られたが、思うような活動が出来ないうえに入院した不甲斐ない自分自身に対する怒りで逆に気力がみなぎった。そして夢の実現を貫く決意とそれを実行する計画が固まった。退院後、体力が元に戻るまで約 1 ヶ月かかった。

体力回復後、カウンターパートに、媒介虫対策班がマラリアやデング熱等の対応をしている時は、村落でシャーガス病の啓発活動することを伝え、許可を得た。その上で、SIBASI モラサンの県保健推進員長に、県内各市で保健推進員の会合がある時を利用し、保健推進員へ計画を説明し、協力要請させてほしい旨相談した。計画の内容は、“県内各市の街中にある保健所までは公共交通機関で行き、保健所でその地域で活動している保健推進員と落ち合い、そこから奥深くの村落にある学校まで保健推進員に案内してもらい、学校の子供たちに啓発活動を行う” というものだった。県保健推進員長は快諾してくれた。

県内各市で行われる保健推進員の会合に出席し、啓発活動の計画を説明した。そして作成した申請用紙を配布し、計画に協力したい時、その用紙に日時、場所、保健推進員名、電話番号を記載し、SIBASI モラ



啓発活動の為、訪れた村落の小学校

サンまで提出して欲しい旨、依頼した。保健推進員たちは皆誠実で興味を持って聞いてくれた。程なくして続々と保健推進員たちからの啓発活動の依頼が来始めた。こうして保健推進員達たちは私の日替わりのカウンターパートとなった。

啓発活動を行うにあたり使用したのは、プロジェクトが作成し、保健推進員たちに配布したシャーガス病啓発の紙芝居(ロタフォーリオ)だった。私は保健推進員と同じマテリアルを使用し、同じように村落を歩き回り、啓発活動をしたかった。啓発活動当日は、リュックにシャーガス病啓発の小冊子を詰め込み、ロタフォーリオを抱えて、県内各市の保健所まで行き、そこで保健推進員と落ち合った。そこから保健推進員の車やバイクに乗せてもらい、村落奥深くの学校や集会所に行き、啓発活動を行った。啓発活動開始当初は辿々しいスペイン語でロタフォーリオのセリフを読む事で精一杯だったが、それでも村落の子供たちや人々は温かく笑顔で聞いてくれた。保健推進員たちもおおらかに見守ってくれた。

保健推進員たちとその様な活動を続けていった。場数をふみ、経験値が増えていく事で、最初は単調にしか行えなかった啓発活動は、次第に知識や情報が肉付けされ、そして状況に応じて柔軟に対応する事が出来る様になっていった。また啓発活動の評判を聞いて、保健推進員以外からも啓発活動の依頼が来るようになった。学校やそれ以外から直接依頼を受けるようになり、啓発活動の機会がますます増えていった。フィールドを仕事場としている媒介虫対策班は保健推進員同様、村落までの行き方や土地を熟知している。そこで村落まで単独で行くために、それらの情報を媒介虫対策班の同僚から日々入手し、県内の土地勘も身につけていった。またモラサン県は他県に比べ治安が良い為、ヒッチハイクや自転車を駆使して、啓発活動現場まで行くこともあった。



小学校でのシャーガス病の啓発活動

日々異なる村落へ行くことは冒険だった。それほど奥深くない村落にある学校は規模が大きく一日で数百人もしくは数十人の子供たちに啓発活動を行う一方、奥深い秘境のような村落にある小さな学校で数人の子供たちに啓発活動をする事もあった。森の中の秘境もあれば、木々はなく白い荒野で他の惑星にいるかのような秘境もあった。それらは全て変化があり、美しかった。それらの秘境にある村落にたどり着くため、保健推進員のバイクに乗せてもらったり、一緒に長時間歩いたりし

たりして行った。保健推進員の協力なくしては不可能だった。村落に着くと、トルティーヤを焼く匂いや家畜の匂いが入り混じった独特な匂いがした。その匂いを感じるとほっとした。村落の光景や人々の様子は、自分が幼少だった頃の日本を思わせ、懐かしさを感じた。人や家や自然や言葉が違うにも関わらず、なぜか日本にいる以上に日本らしさを感じた。不思議な感覚だった。村落の学校の子供たちは皆純粹で、外国人である自分に対して偏見が無く、笑顔で接してくれた。子供たちと話す事で、自身の心の中が洗われるような気持ちになった。充実した啓発活動の毎日で幸せだった。

村落での啓発活動が軌道に乗った時に、PAO 作成の時期が来た。PAO とは厚生省の年間活動計画で、SIBASI の活動の全ての年間計画を作成し厚生省に提出するものだった。カウンターパート



から、シャーガス病啓発活動のモラサン県の責任者という理由で、作成を指示された。カウンターパートからようやく使える人間と認めてもらえたような気がした。

協力隊の任期を終える半年程前、サンフランシスコゴテラ市の保健推進員から管轄の学校で啓発活動する旨依頼を受けた。その学校は町はずれにあり、村落にはないが、私立学校の為、村落から登校してくる子供も多かった。その学校で一人の教師と出会った。その教師は初対面の日本人にも関わらず、あけっぴろげな性格で、外国人とのコミュニケーションに慣れていて、サイズが小さい私の手足を見て面白がって、自分自身の手足の大きさと比べたがった、ユーモラスで興味深い人物だった。お互いのメールアドレスを交換した。その教師は私の自宅から徒歩5分くらいのところに住んでいた。その後、忙しい活動の合間を縫って頻繁に会うようになった。

充実した啓発活動の毎日が過ぎていき、協力隊の任期を終える頃には、県内全 26 市で延べ約 100 学校、1 万人に対して啓発活動を行っていた。

SIBASI モラサン最後の勤務日、夕方外出先から戻ってきたカウンターパートと県保健推進員長に会った。カウンターパートは私に「お前がいなくてもシャーガス・プロジェクトは続けるぞ。そしてお前と 2 年間やって来たように後任隊員とも頑張るぞ」と言った。その言葉を聞いて、私の活動が報われたような気がした。カウンターパートと県保健推進員長には本当にお世話になった。言葉では言い尽くせない程だ。彼等は男の中の男だ。なので、涙の別れなどあり得なかった。「ノス ベモス！！」といつもどおりに別れた。

任期を終え、エルサルバドルを出国する為、サンフランシスコゴテラ市を去る前日、一日かけて市内を隅々まで歩き、街角や市場の様子を写真に収めた。知り合いのユーモラスな教師が、強い日差しの中、一日中私に付き合ってくれた。教師と将来の約束をした。教会ではロメロ神父のミサが行われており大変な賑わいだった。

協力隊として、エルサルバドルに赴任した当初は、何かにつけ、エルサルバドルと日本を比較した。しかし 2 年間、この国の人々と生活し、文化や習慣に溶け込み、協力隊としての活動したことで、それも無くなった。エルサルバドルにも日本にも、それぞれ良い面、悪い面があり、エルサルバドルも日本も同じくらい好きで嫌い、つまり二つの国を完全に並列に見ることが出来るようになった。どちらが上でも下でもなくなった。任期を終えエルサルバドルを去る時、その 2 年前に日本を去る時に感じたのと同じ感情を、エルサルバドルに対して感じた。

私はエルサルバドルに赴任する前、協力隊の訓練所にいた頃、途上国で活動する自分自身のあるべき姿を勝手に想像していた。それは《理想一少しでも多くの子供たちにシャーガス病の恐ろしさを伝えたい。子供たちが大人になった時に“昔、サシガメが危険だと言っていた日本人がいたな”と記憶の片隅に留めておいて欲しい一実現の為にシャーガス病感染リスクの大地を毎日歩き



サシガメ殺虫剤散布機

回っている自分》というものだった。限りなくその姿に近い活動を任期最後まで貫くことが出来た。大変幸せで充実していた。協力隊になることは長年の夢だった。ずっと途上国で活動する自分自身の理想の姿を思い浮かべてきた。エルサルバドルで協力隊としての活動した経験は、その理想の姿に限りなく近く、有益であっただけでなく、人生のハイライトと言えるぐらいの貴重な経験だった。

2009年に日本に帰国してからも、エルサルバドルとの関係はずっと続いている。今も家の中ではスペイン語が公用語で食事はエルサルバドル料理、インテリアはフェルナンド・ジョルトだ。ユーモラスな教師と2010年末に結婚し、2012年、2018年とふたりの子供が生まれた。SIBASI モラサンの同僚たちともSNSで繋がっている。

昨年12月下旬にSIBASI モラサンの秘書からカウンターパートが新型コロナに感染し、入院していて重篤だと連絡があった。その後、1月中旬にカウンターパート本人から「もう20日間入院しているが、危機的な状況を脱して3日経って今は安定している」と直接連絡があり、安心した。そしてその後無事退院したと思っていた。SIBASI モラサンの同僚の多くは新型コロナに感染しても皆回復したと聞いていた為、誰よりもアクティブなカウンターパートなら絶対大丈夫だと信じていた。しかし2月下旬に亡くなった。カウンターパートがSIBASI モラサンにシャーガス病プロジェクトを呼んでくれなかったら、夢だった協力隊としてエルサルバドルで活動する事は出来なかった。またモラサン県サンフランシスコゴテラ市の学校で妻と出会うこともなく、ふたりの子供にも恵まれることはなかった。カウンターパートは私の夢を叶えてくれただけでなく、人生を変えた恩人であった。カウンターパートは亡くなってしまったが、彼が変えてくれた私の人生をエルサルバドル人の妻とふたりの子供と一緒に精一杯生きていこうと思う。

笠原 泰生(かさはら やすお)氏

2007年から2009年まで、モラサン県で青年海外協力隊(感染症対策(シャーガス病対策))として活動。現在は神奈川県でエルサルバドル人の妻と二人の子供と暮らしている。